

世界に目を向け、未来を見つめる。

[ボイス・オブ・ライフ]

VOICE OF LIFE

Take Free

2025. SPRING

COVER PHOTO

毒ガスの後遺症で常に酸素吸入が必要なハディザ・アミン(左)さん。支援団体のロクマンさんと一緒に。

クルド人への民族浄化

ハラブジャの記憶

09



Dialogue for People

取材／安田菜津紀・佐藤慧

イスラエルによるパレスチナでの民族浄化が続いている。差別を背景とし、存在そのものを抹消する大量殺戮といえ、ナチスドイツによる「ホロコースト」を思い浮かべる人も多いかもしれない。しかし人類史には、世界大戦以降も多くの虐殺が存在し、それらは今なお真相不明や根本問題の解決に至っていない。

2024年末、イラク南部の人里離れた砂漠で、約150人のクルド人女性と子どもの遺体が発見された。中には生後10日未満の乳児の遺骨もあったという。虐殺の被害者だと見られており、周辺には同様に遺体の埋まっている場所が数カ所確認されている。クルド人に対する虐殺は、未曾有の民族浄化でありながら、まだまだ世界的に認知されているとは言い難い。



壮大な自然の広がるハラブジャの光景。

迫害され続けてきたクルド人

イラクやシリア、トルコ、イラン、そしてアルメニアなどに暮らすクルドの人々は、長きにわたる民族としての権利を認められず、各国でマイノリティとして迫害を受けてきた。その背景には、植民地時代の国境画定や、大国間の勢力争いが深く関わっている。

クルド人への民族浄化



[上]小高い丘の上に作られた、犠牲者の方々の墓地と名前の刻まれたモニュメント。[下]アンファール博物館に展示されている虐殺の被害者の写真の一部。

第一次世界大戦後、サイクス・ピコ協定により中東は欧米列強によって分割統治された。この際クルド人の居住地域は複数の国に分割され、独自の国家を築くことは叶わなかった。トルコをはじめ、独立して「国」となった地域では、クルド人に対する同化政策や弾圧が強まり、大規模な虐殺事件も発生し

た。イギリスやアメリカなどの大国は、石油などの資源獲得を目指し各国の政情に介入し、冷戦時代には代理戦争の舞台ともなった。1970年代、イラクのバアス党政権はクルド人との和平合意により自治を約束したが、実際には十分な自治は実現せず、クルド人居

住地域の境界線を恣意的に定めるなど、約束は反故にされた。特にキルクークなど、石油資源が豊富な地域では、アラブ人を大量に移住させ、クルド人を排斥する「アラブ化政策」が推し進められた。こうした強制移住はその後も続き、イラン・トルコ国境沿いでは25万人が軍の管理下にある居住地に移住さ

せられ、虐殺へと続いていく。その後イラン・イラク戦争が長期化し、苦境に立たされた当時のサダムフセイン政権は、クルド人組織を抑制するため、1988年2月から9月にかけて、大規模な掃討作戦「アンファール作戦」を決定した。「アンファール」とは、イスラム教の聖典『コーラン』の中に出てくる「戦利品」という意味の言葉だが、政権はこの言葉を「クルド人虐殺」へとあてはめ、その行為を正当化した。わずか7カ月あまりで5千以上の村々が破壊され、10万人から20万人以上のクルド人が犠牲になったと推定されている。「ハラブジャの悲劇」は、その最中に起きた。

化学兵器による虐殺

風に揺れる緑の先には、雪で白く染まった壮大な山脈がそびえている。イラク北東部の街ハラブジャは豊かな土壌を持ち、果実や野菜の質の高さでも有名だ。しかしそこはかつて、イラン・イラク戦争の最前線の街のひとつだった。

1988年3月16日、砲弾が飛び交う中、人々は自宅の地下や防空壕に身を潜めていた。

と、8月には市民の集いも開催されている。

今も戦乱の続く中東地域の取材に行くと、原爆被害への哀悼の言葉を頂くことがある。そして多くの人はこう続ける。「日本は戦争を放棄した国なんですよね。なんて素晴らしいことでしょう」。

しかし実態はどうだろうか。大国の戦争に追従し、「防衛」と称する軍事費予算は右肩上がりだ。過去の加害を軽視する政治家の発言や、排他的な差別も横行している。二度とこうした過ちを繰り返さないために、そして現在進行形の虐殺や差別を食い止めるために、社会は痛みを伴う証言を忘却してはならない。

◎安田・佐藤



[上]ハラブジャ平和博物館(奥)と、当時投下された毒ガス弾の残骸(手前)
[下]空爆で右足を失ったチマン・アリさん。

「爆弾が自宅を直撃しました」
そう語るのは、当時26歳だったハデイザ・アミンさんだ。激しい爆撃に晒され、近隣住人と共に地下室に避難していたという。

「通常の爆弾とは違い大量の煙が出ていたので、私たちは地下室のドアを閉めてそこに留まりました。しかしそれは毒ガスだったのです」

空気よりも重いサリン系のガスが、人々の逃げ込んでいた地下室に充滿した。ガスを吸った住人たちは激しく咳き込み、痙攣し、泡を吹いて倒れ、街のいたるところで人間から動物まで、あらゆる遺体が散乱した。街の人口の1割を超

える、約5千人が犠牲になったといわれる。

ハデイザさんが地下室から脱出したとき、すでに6歳と、生後3カ月の息子ふたりの息はなかった。目が見えず呼吸も絶え絶えの中、なんとか近郊の村まで避難したが、地元の人々を助けに戻った父親は数日後に亡くなった。

ハラブジャの記憶

VOICE OF LIFE

失っている。叔母の家族は、14人全員が亡くなったという。チマンさんは、根深い差別についても語る。

「毒が感染すると言われ、人々は私に近寄ることすら怖がりました」

ハラブジャにはいまだ後遺症に苦しむ人々もいれば、「ハラブジャ出身」というだけで結婚差別に遭う女性たちもいるという。

ヒロシマ・ストリート

理不尽に多くの市民の命が奪われ、その後も苦しみが続いているという意味では、広島・長崎の原爆被害に重なるところがある。実はハラブジャ市内には「ヒロシマ・ストリート」と呼ばれる通りがあり、「同じ痛みを抱えるヒロシマへ、ハラブジャから祈りを伝えよう」

取材

安田 菜津紀 Natsuki Yasuda
中東、東南アジア、アフリカ、日本国内で貧困や災害の取材を進める。東日本大震災以降は陸前高田市を中心に、被災地の記録を続ける。TV、ラジオ番組などにもレギュラー出演中。

佐藤 慧 Kei Sato
アフリカや中東、東ティモール、自然災害の被災地などを取材。世界を変えるのはシステムではなく人間の精神的な成長であると信じ、紛争、貧困の問題、人間の思想とその可能性を追究。

日本における クルドの人々の状況



シリア北東部には多くのクルド人が暮らしているが、長きに渡り戦禍が続いている。写真は武装勢力との戦闘による傷跡の残るコバニにて。

現在の日本では、クルド人の難民申請はほとんど認められていません。トルコ国籍のクルド人が初めて難民として認定されたのは2022年8月のことです。他の難民の認定率も23年は3.8%に留まっており、G7各国の中でも著しく低い水準となっています。

難民認定には「生命の危険」や「自由の剥奪」といった、極めて具体的な迫害の証拠が求められます。しかし、クルド人難民の場合、迫害の具体的な証拠を提示することが困難なケースが多く、認定のハードルが高い状況にあります。日本の難民認定のあり方は、国際的な難民認定基準と合致しているとは言い難く、集団迫害や内戦から避難してきた人々に対しても、難民認定の解釈が恣意的で厳しすぎると指摘されています。特にクルド人の置かれている状況に関しては、その歴史や背景に関する情報が不足しており、難民審査を担当する職員ですら、現状を把握していないことがあります。

そのため日本に滞在するクルドの方々の在留資格は、子どもたちも含めて非常に不安定であり、多くの場合「仮放免」という状況で暮らしています。移動の自由すらもなく、進路選択の制限や経済的な困窮のほか、収容や送還の不安、差別や偏見など、多数の困難に直面しています。「隣人」と共に生きる上で、より包容的な社会を築くことが求められます。

D4P職員のつぶやき

伏見 和子 / D4P広報部



イラクに暮らすクルドの人々の声をお届けした今号、手に取っていただきありがとうございます。日本では不安定な立場に置かれていることの多いクルドの方々に対して、理不尽な中傷が続いています。一人ひとり、様々な背景をもって今ここに居る人たちのことを知り、想像するためにも、今号の発信が役立つことを願ってやみません。D4Pのウェブサイトでは他にも関連記事や動画を掲載していますので、ぜひご覧いただけたら幸いです！



Dialogue for People

認定NPO法人Dialogue for People (ダイアログ・フォー・ピープル/D4P)

国内外様々な地域で社会課題の渦中にある人々取材し、写真や文章、映像などさまざまな表現を通じて、「伝える」ことを主軸に活動するメディアNPOです。どこか遠くの問題に思ってしまう出来事について、誰もが考え、自分の役割を見つける機会を創造し、社会課題の解決につながるきっかけを生み出していきます。

d4p

検索

<https://d4p.world>

BOOK OF LIFE

多様な文化の
魅力に触れる！



故郷の味は海をこえて 「難民」として日本に生きる

著・写真: 安田菜津紀

協力: 認定NPO法人 難民支援協会 (JAR)

ポプラ社

激しい戦争や、マイノリティへの迫害が続いている土地は、残念ながら今も多く存在します。たとえ戦争が終わったり、政権交代が起きたりしても、すぐに安心して故郷に戻るわけではありません。止む無く国外へと逃れた人たちは、家族や友人とも離れ離れとなり、住み慣れた土地とは違った文化の中で、戸惑うことも多くあるでしょう。この本では、日本に暮らす難民の方々が、たくさんの思い出と共にふるまってくれた、故郷の料理の数々を紹介します。シリア出身のクルド人、ジュディさんは、理不尽な政権に声をあげたことで指名手配され、2012年にシリアから日本へと逃れてきました。小さなカップに注がれる、カルダモンの香るコーヒーは、どんな思い出の味なのでしょうか。ほかにもミャンマーのラペットウやカメルーンのオクラスープなど、多様な文化の豊かさを感じられる料理が満載です。難民に関するQ&Aも収録しています。

D4P Kitchen

羊の生肉スパイシー料理

シリア北部のチーク

クルドの人々が暮らす土地では、色々な料理をいただきました。中でもお気に入りの一品がこちら、「チーク」です。日本では手に入りにくい羊の生肉の代わりに、ブルグルやひよこ豆を使うこともできます。同様の料理は近隣地域にもありますが、この強烈な辛さはシリア北部(特にコバニ周辺)ならではの味でした。



癖になる
辛さ!!

材料

- (A) スパイス①: たまねぎ、赤唐辛子、青唐辛子
(B) スパイス②: ムハンマラ(赤唐辛子ペースト)、クミン、コリアンダー、オリーブオイル
(C) 新鮮な羊の生肉
(D) オリーブの塩漬け



手順

- ① (A)~(C)を混ぜ合わせる(スパイスの量は好みで)。
② 片手で握り形を作る。
③ 刻んだ唐辛子を散らし、(D)を沿える。
※最後にオリーブオイルを回しかけてもOK!

各地での取材をYouTubeで配信!



安田菜津紀と佐藤慧が、気になるニュースや出来事をラジオ形式で毎週水曜日に配信。ゲストを迎える回ではインタビューを交えながら、様々なテーマを深掘りしていきます。

D4P YouTube Channel YouTubeで検索!

d4p

検索

